

防衛大学校本科第19期学生及び理工学研究科第12期学生  
卒業式における学校長式辞（昭和50年3月21日）

防衛大学校本科第19期学生及び理工学研究科第12期学生の卒業式を行うに当たりまして、三木内閣総理大臣<sup>注(1)</sup>、前尾衆議院議長<sup>注(2)</sup>、坂田防衛庁長官<sup>注(3)</sup>をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄の方々の御臨席をえましたことは、卒業生はもとより防衛大学校にとりまして無上の光栄と存じます。教職員と学生一同を代表いたしまして、来賓各位の御厚意と父兄の方々の御熱意とに対し、心から御礼申し上げる次第であります。

今回卒業の栄をにないます学生は本科446名、理工学研究科64名であります。本科第19期生の諸君が4年前に防衛大学校に入学されたことは、それ自体が立派な決断でありました。研究科第12期生の諸君が特に選ばれて2年前に入学を許可されたのは大きな名誉でした。諸君の在学中における努力と精進とに敬意を表しますとともに、この際、卒業生諸君の洋々たる前途を祝福して、はなむけの言葉を呈したいと思えます。

本科並びに理工学研究科の卒業生諸君に対して、私は何よりもまず人間としての成長を望みます。科学的な思考力を養い、豊かな人間性をつちかうという本校の教育方針は、時代を超越して妥当します。卒業は諸君の一生における一つの区切りですが、到達点というよりはむしろ出発点というべきでしょう。

第二に私は、卒業生諸君が防衛の専門職としての途に徹することを期待します。防衛の学と術とは深遠きわまりなく、その修得と錬磨に、また研究と開発には限度というものはありません。1967年と1973年との二つの中東戦争をふりかえっただけでも、防衛力をめぐる国際競争のすさまじさは驚嘆に値します。高度の科学技術を研究された理工学研究科の卒業生諸君に対する期待は、まことに大きいといわなければなりません。およそ国家の防衛ほど未知数が多く、方程式の不足する難問はないでしょう。この難問



第3代学校長 猪木 正道

---

注(1) 三木武夫

注(2) 前尾繁三郎

注(3) 坂田道太

と取り組むことは、本科並びに研究科の卒業生諸君にとってまさに男子の本懐であると信じます。

第三に私は、諸君が日本国の防衛力を直接間接に運用する幹部自衛官としての職能倫理を強く自覚していただきたいのであります。防衛力は本来侵略に対する抑止力ですが、物理的には強大な破壊力を有しています。この実力を直接操作するものが高度の倫理的責任感に貫かれているのでなければ、国民から信頼されず、したがってその職責を果すこともできません。

わが自衛隊は、日本国の領土、領海及び領空の平和と安全に責任を負っていますが、国際社会が百数十の主権国家によって構成されている現状の下では、自衛隊は日本国の主権と独立を守ることにより、国際の平和と安全とに対しても重大な義務を果しているわけであります。本科並びに理工学研究科の卒業生諸君が、この崇高な使命感に基づき、今後たえざる研鑽と錬磨とを通じて、わが精強なる自衛隊の将来を背負うことを祈念して、私の式辞を終わります。